

社会科学におけるメカニズム概念の意義

清水 雄也（一橋大学・博士後期課程）

ここ 20 年程の間、社会科学に関する文脈において「メカニズム」という概念が注目を浴びている。この概念は、多くの場合、特に社会現象間の因果関係を論じる際に重要な説明的役割を果たすと考えられている。たとえば、メカニズム概念を用いた因果的説明の支持者たちは、或る社会現象 X が別の社会現象 Y の原因となっていることを確かめるために、それらの間にあるメカニズムを同定することが役立つと考えている。また、すでに X と Y との間の因果関係が確証されている場合でも、X がいかにして Y を引き起こすのかということを知るためにそのメカニズムを明らかにすることが肝要であるということもしばしば論じられるところである。

しかし、メカニズム概念が広く耳目を集め、それに対する人々の期待が急速に高まる一方で、この概念を用いた議論の問題点が徐々に明らかになりつつある。問題の端的な兆候は、メカニズムに関する議論の非統一性に表れている。この概念への人々の傾倒は大きく見れば一つのまとまった流行を形成しているが、個別の議論を仔細に検討してみると各々の概念把握の仕方にかかなりの幅があることがわかる。メカニズムの定義、因果評価におけるメカニズム的観点の必要性、メカニズム分析のための方法論、メカニズム的説明の意義など、様々な論点において意見の分散が見られる。このような状況は、メカニズム概念にまつわる議論の評価を困難にしている。メカニズムへの注目を一過性の流行以上の実り豊かなものにするためにも、この錯綜的状况は解決されることが望ましい。

本発表では、特にメカニズム概念を用いることの意義に着目し、この点に関する主立った見解を整理することで、上述の問題状況を部分的に解決することを目的とする。この際にポイントとなるのが、社会科学におけるメカニズム概念の意義と、社会科学の哲学における当該概念の意義との区別である。従来、この概念が科学的研究において果たす役割と、科学哲学において果たす役割との相違は十分に強調されてこなかった。それらは密接に関連し合っているものの、あくまで別々の事柄であり、分けて論じることが可能なものである。この点は、生物科学の哲学におけるメカニズム論との対照によってより明確になる。

結論の要点は以下の通りである。メカニズム概念は、社会科学の哲学においては科学の実践を記述ないし評価するにあたって非常に有効な概念として機能し得るが、社会科学の現場においては、大まかな方法論の方針を与えはするものの、それ独自の明確な意義を持つとは考え難い。ただし、メカニズム的説明ための方策として近来展開されつつある過程追跡などの具体的方法は、社会科学的研究にとって実質的な有用性を持つことが期待できるものであり、積極的に洗練していく価値がある。